或問　WAKUMON　83
No.35,（2019）pp.83-98

（承前）

# 中国沿岸ピジン――その資料と背景（下）

Umberto Ansaldo, Stephen Matthews, Geoff Smith 著
萩原亮 訳

## 4.文法

CCP の中国語的な特徴については先行研究で既に言及されている。例えば,『英語集全』について言えば,「このピジンにおける統語構造の大部分は広東語の構造に従っている」とされる（Selby & Selby 1995: 128）。しかし，より具体的な主張を述べた議論もある。Shi（1986, 1991）は，ピジンの使用者である大部分の非西洋人は広東語を母語としているため，CCP の構造にも広東語の影響が見られると述べており，Shi が論じた特徴としては，題述構造や類別詞としての *piece(e)*の使用，英語の how を意味する疑問代名詞 *what fashion* の存在（広東語の「點樣」に相当），*tailorman* に見られる *man* を使った複合語，中国語には存在しない述語形容詞の前にコピュラ *belong* を使う用法などがある。Baker & Mühlhäusler（1990）はこれらの特徴が他のピジンにも見られることについて論じており，例えば，トク・ピシンにも CCP の *tailorman* のような，*-man* を使った複合語が存在するという。しかし，Baker & Mühlhäusler は広東語からの借用語と見られる表現があることも否定しておらず，特に，数詞と名詞に関する *piece(e)*の類別詞としての使用は中国語に顕著に見られる用法であるという。

### 4.1. 語彙と音韻

CCP の語彙はほとんどが英語由来だが，ポルトガル語，マレー語，ヒンドゥー語由来のものもあり，そしてもちろん広東語の影響も認められる。Maltino（2003）で挙げられた例では，*pidgin* < business（英語）; *catchee* < *catch* 「持ってくる，呼んでくる」（英語）; *two muchy* < *too much* 「極めて」（英語）; *Joss* < *Deus*（ポルトガル語「神」）; *sabbee* < *saber*（ポルトガル語「知る」）; *chop* < *chapa*（マレー語「切る」）などがあり，よく知られた広東語の語彙として，*taipan*（大班，広東語「支配人」即ち「積荷監督者」）と *fankuei*（番鬼，広東語「外国の悪魔」即ち「西洋人」）などがある。広東貿易の初期段階でマカオが果たしていた重大な役割から予想されるほど，ポルトガル語由来の語彙は一般的ではない。Bolton（2003: 286）では『紅毛通用番話』の 372 語中 20～22 語をポルトガル語由来だとしている。

CCP の音韻を明確に説明することはいくつかの理由から難しい。英語の資料では発音が極端に英語化されており，中国語の資料には以下のような問題がある。（1）異なる方言の漢字音が混在するとともに，広東語では使用されないが，官話方言では用いられる漢字の発音が存在する点（Li et al. 2005: 83; Shi 1991），（2）資料中の漢字はおおまかな発音を表しているにすぎず，

その表記から実際の発音を知ることは難しい点，である。実際の方言における発音を正確に知ることは難しいが，小冊子の使用者にとっては学習の指標とするに十分なものであったと考えられる（Shi 1993: 461）。最も特徴的なのは[r]を[l]で代用することである。[r]はもともと広東語に存在していないため，rice > *lice* のように，候補となりうるものの中で広東語では唯一非鼻音である[l]によって代用したと考えられる（Shi 1991: 14）。もう一つの一般的な特徴は，語末の子音が消失することで，これもまた明らかに，音節末子音が鼻音か内破音に限定される広東語の影響である。Baker & Mühlhäusler（1990）は母音体系には広東語の強い影響は認められないと論じているが，stop > *sitap* のような CCV > CVCV という音節構造の再構成は広東語の影響と思われる（Bolton, 2003: 162）[1]。

4.2. 名詞と名詞フレーズ

名詞フレーズの構造は，類別詞 *piece(e)*の使用に見られる典型的なシナ語派的特徴と同様，シナ語派と非シナ語派との構成素構造の違いを表すものである。[NUM-CL-N]や[DEM-CL-N]のような構造は，広東語に見られるように典型的なシナ語派的構造といえる。

（1）*Yāt go yàhn* *Nī go yàhn*
one CL man DEM CL man
「一人の人」 「この人」

この構造は CCP に顕著に見られる。

（2）You wantchee catchee one piece lawyer
「君は弁護士を雇うべきだ。」（『英語集全』4 巻 32 項）[2]

*piecee* とは別に，『英語集全』では[DEM-CL-N]構造内における類別詞として *chop* が用いられている。

（3）Thisee chop tea what name
「これらのお茶の名前は何ですか」（『英語集全』6 巻 15 項）

単一の類別詞が多数の単語に用いられるということは，必ずしも広東語の類別詞体系の「縮小」を意味しない。実際はより多くの類別詞が存在し，それぞれが特化した用法を持っているもの

[1] ローマ字表記の分析は難しく，ピジンの音韻が元々変化しやすいことも考慮して，CCP の音韻的特徴についてはここでは論じない。
[2] 『英語集全』原本の巻数とページ数は Li 他（2005）で書き起こされたものを参考にした。そこでは例文を読み易くするため多少修正が加えられている。原本には英語の訳が記されているが，より正確に言うと，ピジンに対して傍注として書かれた標準的な英語訳である。

の，実際の発話の中では圧倒的に一つの類別詞が多用される場合が多いからである（広東語では‘個’，官話方言では‘个’，他のシナ語派の言語については Erbaugh & Yang 2006 を参照）。CCP は実質的に一つの類別詞のみを持つ体系に移行する前にこの傾向を有していたと思われる（[DEM-(CL)-N]の構造内で類別詞が現れない（19）の例を参照）[3]。

CCP の代名詞はこれまで注目されることが多かった。Baker & Mühlhäusler（1990: 104）や Tryon 他（1996: 488）では初期段階の一人称として *I, my, me* の 3 つが見られることを紹介している。当初はこれら 3 つの一人称全てが主語の位置に現れ，*my* と *me* は目的語の位置にも見られるが，その後 *my* のみがどちらの機能をも持つようになったとし，これが CCP の文法体系の安定を示す証拠であるという。Smith（2008）は，『英語集全』の中では二人称と三人称についてはほぼ単一のものが用いられるのに対し，一人称は主語と目的語における語形の違いを伴っていると述べている。正式な一人称としての‘my’の出現は，世界的に多くのピジンやクレオールが‘*mi*’を取り入れたことを考えると特筆すべきことであろう。Baker & Mühlhäusler（1990）では，‘my’は‘I’と‘me’が一般的に使用される以前の 1830 年代に急速に一人称として使用されるようになってきたと述べている。彼らはこの変化が書面化された教科書の導入によってもたらされたとしているが，時期を明言しているにも関わらず，その確実な証拠は存在しない。‘米’という漢字は広東語で *máih* と発音するが，官話音の[mi]として小冊子に記されているためである。もう一つの複雑な要素は，‘米’と‘未’（19 世紀の広東語で *mi* と発音する）という漢字の形が似ていることで，印刷の段階で混同した可能性もある。

複合語は CCP において顕著に見られ，特に人と職業の場合に多い。例えば *man*（‘man’，広東語 *yàhn*（人）の借用語）の複合語では *ba ba man*（理容師），*se lei man*（船乗り），*guk man*（料理人）などがある（Martino 2003: 86）。*Joss pidgin*（神の仕業），*Joss house*（寺院）のように修飾語と名詞の複合語も存在する。もう一つの広東語からの借用語は‘fashion’を由来とする *fasi* という語（広東語の *yéuhng*（様）「様子」に相当する，例えば *dím yéuhng*（點様）「どのように」のように用いる，Shi 1986 参照）で，例えば *wat fa si* 「どのように，どんな方法で」，*niu fa si* 「新しいやり方，新しい方法」などがある（Martino 2003: 87）。『英語集全』では，（5）における *how fashion* が *dím yéuhng* と対応して用いられている。

（4）My savvy how fashion do

「わたしはやり方を知っている。」（『英語集全』4 巻　33 項）

（5）広東語

*Ngóh jī dím yéuhng jouh*　（我知點様做）

---

[3] CCP の前置詞に関するより具体的な研究は Li, M（2011a）を，long については Li, M（2001b）を参照されたい。

I know how fashion do
「わたしはやり方を知っている。」

4.3. コピュラ・ゼロコピュラと存在表現

Baker & Mühlhäusler（1990）は少なくとも2つのコピュラが存在したと述べている。(6）では‘have’の例を，(7）では *hab* として用いられる例を示す。*hab* は所有動詞であり，またアスペクトマーカーとしても機能している。Baker & Mühlhäusler（1990: 103）によると，*hab* がアスペクトマーカーとして用いられることが多くなると, *belong* がコピュラとしての機能を引き継ぎ，最終的に，*hab* と *habgot* は所有構造で用いられるようになったという。

（6）Chinese man very great rogue truly, but have fashion, no can help
「中国人は悪い人が多い，しかしそれはどうしようもない。」（1748 年，Baker & Mühlhäusler 1990: 103）

（7）My hap go court one time
「私は法廷に一度行ったことがある。」(『英語集全』4巻 4項）

コピュラ構造についての記述は比較的少なく，一般的なシナ語派の言語と同じく，CCP もゼロコピュラだとする主張が多い（これに関しては既に Hall 1944 で言及されている)。その例は (8) の通り。

（8）Englishman very good talkee; all heart bad, — no talkee true — too much a proudy （Selby & Selby 1995: 138）

*got* という動詞は（9）のようなフレーズの中で用いられ，(10）の場所，所有，存在を表す広東語の動詞 *yáuh*（有）と酷似している（Matthews & Yip 1994)。

（9）You got how muchee piecee children
「あなたは何人子供がいますか？」(『英語集全』5巻 55項）

（10）*Léih yáuh géi dō go saimānjái?*（你有幾多個細路仔？）
you have how many CL children
「あなたは何人子供がいますか？」(広東語）

（6）における2つ目の句，*but fashion, no can help* は *fashion* が CCP において多義語であるため訳すのが難しい。例えば，*so fashion you buy some beefoo*（『英語集全』6巻 26項）という文は「それなら，牛肉を買ったほうがいい」の意味であるが，この‘fashion’には実質的な意味がない。CCP においてよく見られる‘fashion’は，広東語で「それで，その場合は」を意味する

*gám yéuhng*（咁樣）という語の借用である。したがって，上の例の but fashion は「では，まあ」を意味し，広東語の *haih gám yéuhng*（係咁樣）「まあそういうことで」というフレーズに相当する。『英語集全』では *hap* はほとんどの場合 *got* と共に用いられ，シナ語派の言語における存在を表す構造に対応しているため，コピュラであるかどうか定かでない。同じことは Hall（1944）のデータの中にも既に見られ，CCP がゼロコピュラであることを強く示唆している。しかし，語彙的な機能を持った *belong* が『英語集全』で用いられていることは注目に値する。*belong* の例は（11）と（12）を参照。

（11）These belong you?
「これはあなたのものですか？」（『英語集全』4 巻　53 項）

（12）The tea belong first crop
「このお茶は初物です。」（『英語集全』6 巻　14 項）

*belong* がどの程度コピュラの機能を持っているか，また以下の例において *belong* が前後のフレーズの関係を示すものとなっているか（Shi 1991: 24 を参照），明らかでない。

（13）You belong honest man
「あなたは誠実な人です。」（Selby & Selby 1995: 136）

（14）This belong my plum cashee
「これは私が払ったものだ。」（『英語集全』6 巻　3 項）

否定としては，*no*（*lo* の場合もある），または *no got* が用いられる。

（15）Missy __ no got houso
「__さんは不在です。」（『英語集全』6 巻　38 項）

（16）No got suchee thing
「そういうものはありません。」（『英語集全』4 巻　51 項）

否定の存在表現 *no got* は典型的なシナ語派的特徴といえる（広東語の *móuh*（冇），官話方言の *meiyou*（没有）に相当する）。CCP におけるコピュラの性質に関して注意すべきもう一つの点は，形容詞フレーズ，副詞フレーズが述語として用いられたときに動詞のように振舞う点である。これは類型論的にゼロコピュラの言語と関係があるとされる特徴であり，典型的なシナ語派言語の特徴である（たとえば広東語の *léih hóu faai*,（你好快），「あなたはとても速い」のようなもの）。この特徴は『英語集全』で何度も見られる。

（17）Court expense too muchee;
「訴訟費用がとても高い。」（『英語集全』4 巻　32 項）

（18）My too muchee trouble
「私はとても困っている。」（『英語集全』4 巻　32 項）

（19）Thisee wine glassee no clean
「このワイングラスは汚い。」（『英語集全』6 巻　47 項）

4.4. 副詞の位置と前置詞フレーズ

中国語の統語構造の影響を示すもう一つの点は副詞による修飾である。Selby & Selby（1995: 128）は時間と場所を表す副詞は英語の統語構造に対応していると主張しており，確かに以下のような例が見られる。

（20）My talkee you tomorrow
「明日あなたに知らせます。」（『英語集全』6 巻　9 項）

この例における *tomorrow* の位置は中国語では非文法的である。しかし，『英語集全』では（21）や（22）のように主語と動詞の間に副詞が現れる例が多く見られる。これは英語では非文法的だが，*Ngóhdeih tīngyaht būn*（我哋聽日搬）「私たちは明日行く」のように，広東語では文法的である（Matthews & Yip 1994: 187 を参照）。

（21）We tomorrow make move
「私たちは明日行く。」（『英語集全』4 巻　49 項）

（22）He every day tipsy
「彼は毎日酔っている。」（『英語集全』4 巻　55 項）

類型論的に見た場合，最も明確なシナ語派的特徴は，（23）～（25）に見られるような動詞の前に *long* を用いた前置詞フレーズである。

（23）My no long you buy anymore
「私はあなたからはもう買わない。」（『英語集全』6 巻　26 項）

（24）You can long my catchee one piecee good boy
「私のために良い男の子を買いなさい。」（『英語集全』6 巻　51 項）

（25）My long you takee alla

「私は全てあなたから買う。」（『英語集全』6 巻　8 項）

*long* という前置詞は英語の‘along’に由来し，広東語の *tùhng*（同）のように動詞の前に置かれる。（26）の共格的用法，（27）の受益者格的用法，（28）の奪格的用法において現れる[4]。広東語の例を挙げる。

（26）*Kéuih tùhng yāt go pàhngyáuh góng*
s/he with one CL friend talk
佢同一個朋友講
「彼は友達と話している。」

（27）*Ngóh tùhng léih ló yāt go*
I with you take one CL
我同你攞一個
「あなたに一つあげます。」

（28）*Ngóh tùhng léih máaih yéh*
I with you buy things
我同你賈嘢
「あなたから買います。」

（23）～（28）のような[PP-V-NP]という構造は，類型論的に珍しい語順であり（Dryer 2003），CCP のこの特徴がシナ語派由来であることは疑う余地がない。同時に，特に英語で記された資料においては，long を用いた前置詞フレーズが動詞の後ろに置かれる例も見られる。

（29）I like werry much, do little pidgeon long you.
「私は是非あなたと少し仕事がしてみたい。」

広東語から借用したもう一つの場所表現は *side* を用いた構造である。

（30）bring that egg come thisee side
「その卵をここに持ってこい。」（『英語集全』6 巻　40 項）

（31）come Sydney side
「（彼女は）シドニーから来た。」（『英語集全』6 巻　32 項）

---

[4] CCP とトク・ピシンの long（Smith 2002 を参照）の間には淵源関係もしくは文法化に至るプロセス，或いはその両方に関わる興味深い類似点がある。

実は，‘side’のこのような方法は今も香港英語において一般的であり，*Kowloon side*「九龍のほう」のように使われる。これはCCPの表現の名残が現在の香港英語に見られる数少ない例の一つである。

動詞連続構造（SVCs）はCCPによく見られる構造であり，多くの例が存在する（Escure近刊論文を参照）。これに関するよく知られた例は*look see*である（広東語の*tái gin*「睇見」すなわち「見える」の借用）。

（32）My wantchee look see counta
「私は勘定を確認したい。」（『英語集全』6巻　56項）

（33）You look see dog no bitee you
「犬に咬ませてはいけない。」（『英語集全』6巻　58項）

Escure（近刊）でも，（34）～（36）のような，特にcomeとgoを中心にした動詞連続について述べている。*daap fóchē làih*（踏火車來）「列車で来る」のような動詞連続もシナ語派の言語の特徴である。動詞連続構造はCCPにおいて複数のイベントを表すこともできる。

（34）Bring come here
「それを持ってこい。」（『英語集全』4巻　43項）

（35）What time you sendee tea come
「あなたはいつお茶を届けに行きますか？」（『英語集全』6巻　16項）

（36）Catchee one piece man go
「男を一人雇っていく。」（『英語集全』4項　66項）

4.5. テンスとアスペクト

CCPにおいて，テンス・アスペクトマーカーは完了を表す*hap*（或いは*hab*）のみのようである。

（37）my hap go court once
「私は法廷に一度行ったことがある。」（『英語集全』4巻　32項）

（38）Coolie hap shutee alla window
「苦力は窓をすべて閉めたか？」（『英語集全』6巻　53項）

*hab*の使用は英語と広東語双方の文法に基づいている。（38）のような疑問文において，広東語では存在を示す動詞*yáuh*（有）「持っている」を使用する。（39）を参照。

（39）*Yáuh móuh sāan saai chēung a?*
have not close all window SFP
有冇鎖窗啊？
「あなたは窓をすべて閉めましたか？」

（38）には数量詞 *alla* も見られる。CCP において *alla* は（40）～（41）で示すように包摂マーカーとして機能しており，広東語の *dōu*（都）に相当する。

（40）Green tea black tea alla hap got
「緑茶と紅茶，どちらもある。」

（41）Two men alla same
「我々は似ている。」

（42）*Léuhng go yàhn dōu yāt yeuhng*
two CL person all one same
兩個人都一樣
「彼らはどちらも同じだ。」

4.6. 中国と西洋の資料における疑問詞疑問文

中国と西洋それぞれの資料における疑問文の違いは一目瞭然である。英語で記された資料には，疑問詞を文頭に置いた英語に典型的な表現が見られる。

（43）What thing that Poo-Saat do?
「Poo-Saat（菩薩）は何をした？」（Morrison 1807）

対照的に，『英語集全』では疑問詞が移動していない例が頻出し，これは中国語の文法に適っている。

（44）You give what price
「どれくらいの値段を付ける？」（『英語集全』6 巻 18 項）

『英語集全』において（44）のように疑問詞が移動しない例と，（43）のように疑問詞が移動する例の双方が存在することから，疑問詞の移動は選択的であることが分かる。類似した 2 つの表現においても，疑問詞が移動するかしないかは定まっていない。

（45）You wantchee how muchee?

「どれくらい欲しい？」（『英語集全』4 巻　54 項）

（46）How muchee more you wantchee?
「他に何が欲しい？」（『英語集全』4 巻　54 項）

英語で記された資料（一貫して疑問詞が移動する）と中国語で記された資料（疑問詞が移動するものとしないものがある）を比較することにより，中国語話者が話す CCP は，英語話者或いはヨーロッパ諸言語の話者が話す CCP と体系的に異なっていたことが分かる。

4.7. 題述構造と談話構造

基層言語の影響が見られるもう一つの点は，Shi（1991）が論じている題述・談話構造である。『英語集全』はこの特徴を分析するのに十分な量の例がある。下記の例において，文中で主題とされる部分を[　]内に示す。

（47）[Good cargo] how can sellum cheap
「良い商品をどのように安く売る？」（『英語集全』6 巻　11 項）

（48）[that pricee] he no sellum
「この価格では彼は売らない。」（『英語集全』4 巻　77 項）

中国語と同じように，主題は 2 つに分けられる。一つは，（47）の目的語である *good cargo* のように動詞と結びつく語として理解されるもの，もう一つは（48）の *that pricee* のように，*sellum*「売る」の主語でも目的語でもなく，述語との結びつきがより緩やかなものである。

4.8. 動詞 *makee*

他の動詞の前に現れる *makee*（< *make*）の使用も典型的な CCP の特徴である。

（49）Go makee findee
「探しにいけ。」（『英語集全』4 巻　45 項）

（50）makee catchee he
「彼を捕まえろ。」（『英語集全』4 巻　77 項）

*makee* は広東語では使用されないため，基層言語の影響とは言えない特徴である。これらの例では，*makee* は単に動作動詞として機能しているようであり，（49）の *go makee findee* というフレーズは，方向を示す *go* が *makee findee* と繋がっているので動詞連続構造と言える。*makee* が名詞から動詞を作る働きをすることもあり，（51）ではポルトガル語の *conta*「勘定」と結びつい

ている。

（51）my wantchee makee conta
「私は勘定を数えなければならない。」（『英語集全』6 巻　11 項）

（52）you hap long nother houso make contract tea
「これまで誰かとお茶の契約を交わしたことはありますか？」（『英語集全』6 巻 19 項）

この特徴は様々な CCP の資料に一貫して現れている。

## 5.結論

これまでの歴史的な問題に対する検討及び上記の文法データに基づいて，CCP の形成に対する考えを述べる。CCP は 18 世紀，珠江デルタ周辺で行われた広東貿易の初期に発生し，主に以下の 2 つの場所で根付いた。一つは外国の商品に対する一種の税関として機能した黄浦港，もう一つは広東（広州）のファクトリー，即ち西洋の貿易会社に所属する商人たちの居住区である（Bolton 2003: 156; Martino 2003: 24; Van Dyke 2005）。

広東語と CCP の構造上の類似点から見ると，『英語集全』における CCP は基層言語である広東語の影響を示していると言える。したがって，まず CCP の文法は広東語の統語的及び意味的特徴が移動したものだと考えるべきである。『英語集全』に見られる CCP のデータにおいて広東語は圧倒的な影響力を持っているため，必ずしも認知ストラテジーとしての簡易化（simplification）を考えずとも，CCP が形態的に孤立語的であることは説明可能である。例えば，ゼロコピュラ文は間違った英語の文というよりは，シナ語派的な特徴によるものと考えられる。『英語集全』についての更に詳しい分析が進めば，シナ語派的な基層言語の影響と共に，CCP の文法におけるより深い性質が明らかになるかもしれないが，上記の特徴は，CCP の主要な特徴がシナ語派的なものだと主張するのに十分である。その特徴をまとめると，（1）[NUM/DEM-CL-NP]という構造における類別詞，（2）ゼロコピュラ，（3）存在動詞，（4）所有動詞，（5）動詞の前における副詞と前置詞フレーズ，（6）動詞連続構造，（7）題述構造などである（Ansaldo 2009）。

疑問詞疑問文においては，中国語の資料でのみ疑問詞が移動しない例が見られ，英語で記された資料とは体系的な対比をなす。このデータから，英語話者が用いた CCP と広東語話者が用いた CCP の間に存在するバリエーションについて考えなければならない。現在の分析では決定的な答えは出せないものの，英語或いは広東語の文法に影響された連続体の存在，あるいはイギリス人と中国人の言語使用域（レジスター）を両極とする異なる言語変種の共存が想定される。広東貿易の早い時期に安定したピジンが発達したとは考えにくいとするならば（この観点

についてはAnsaldo 2009; Martino 2003を参照)，我々は後者の解釈を取るべきである。いずれにせよ，書面化された中国語の資料の存在，中国人へのCCPの普及によって，CCPはシナ語派的な文法，語彙，音韻の多大な影響を受けた。Bolton（2003）で論じられているように，CCPの言語変種は一貫して存在していたと思われるが，話者が限られていたことや，使用された期間が比較的短かったことからすると（Tryon他 1996)，安定したものではなかったと考えられる。したがって，CCPは以下のように発展したと推測される。

広東貿易の初期において弱い立場にあったイギリス人は，中国人とコミュニケーションを取るために自分たちの言葉を単純化しようと試みた。直感的にそれを行ったのか，中国語の「知識」を持つ者の助けを借りたのか，という問題については，後者の場合そのような助けを得ることは難しいと考えられるため，前者である可能性が高いと言える。この段階では，典型的なピジンの進化において数々の変種を生む一因であるところの，その言語を使うものの，話者であるとは言えない第三者的な集団が関与することが多いので（常にそうだという訳ではない)，CCPの媒介者は他の西洋商人であったと言えよう。この段階は広東貿易の時期と重なる。

イギリスが力をつけるにつれ，彼らのジャーゴンは次第に中国人の目に魅力的に映るようになっていった。中国人はその言語を学ぼうとし，その結果機能的に拡張していったが，両者の社会的な距離を維持しようとする力が働き，その言語は明確にジャーゴンであり続けた。この段階はファクトリー内部で始まったはずであり，その他の同様の環境においても引き継がれていったと考えられる。

したがって，CCPは2つの「高度な」文化同士の接触の産物ではないということが言えよう。この考えは19世紀半ばに至るまで，イギリスの立場が弱かったことを示す社会史的考察によって裏付けられており，これにより，なぜ『英語集全』のデータよりも英語の影響が強いCCPの痕跡が存在するのか，といった問題も説明可能である。中国の政府によって強制された隔離が部分的に成功したことを我々が強調するのは，中国と西洋商人との接触が重要視されなかったという意味ではない。しかし，初期段階において両者の距離は隔たっており，中国人は赤い髪をした西洋の野蛮人たちに対して，西洋人が中国人に対して抱く関心に比して，はるかに低いものしか抱いていなかった。その結果，Hall（1944，Ansaldo 2009も参照）が推測しているように，当初英語話者（及びその他の外国人）によってピジン化された言語が生まれたことは十分に想定される。Van Dyke（2005: 80）によれば，広東において，早ければ1715年に西洋商人によって用いられたCCPの変種が少なくとも一つは存在していたといい，彼によると，通訳の活動によるものというよりも，商人に需要があったためにピジン英語が発達していったという。中国語を身につける能力も許可もなかった船乗りや商人たちが，非公式な貿易をするためにCCPを発達させた，と考えるのが最も妥当であろう（正式な取引はほとんどが通訳によって執り行われたが，貿易相手との直接的な接触は通説よりも広く行われていた，という新たな説に関してはBenson 2005を参照)。

しかし，Martino（2009）でも言及されているように，ポルトガル語に遅れて，CCP は 18 世紀半ば以降からようやく発展し始めたと考えられ，CCP が実際に存在した時期としてはこの方がより現実的である。その時期に至るまでマカオという土地，そしてマキスタという言語がまだ支配的であっただけでなく，18 世紀前半まで貿易は大きく制限されていたためである。イギリスと中国の接触が表面的で時期的にも短く，中国が強制した社会的隔離による制約も考慮すると，早期の CCP はかなり限定的なものであったはずであるが，アヘン戦争以後，その状況は劇的に変化することとなった。特に茶と絹に関する貿易が爆発的に増加した結果，広東のファクトリーと黄浦において，西洋人と中国人の接触はもはや制限されたものではなくなり，複数の都市における港と沿岸にも広まっていった。外国の商人が税関の職員として任命される一方，外国の貿易会社は中国人の買弁を任用した（Fairbank & Goldman 1998: 203）。換言すれば，ネットワークがより多様になり，その数と複雑性が増すにつれて，CCP は中国を越え，最終的にはオーストラリアやアメリカ合衆国西岸へと普及していったのである（Mühlhäusler, &Baker 1996）。

参考文献

Adelaar, Alexander, & D.J. Prentice 1996. Malay: Its history, role and spread. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler & Darrel Tryon (eds.), *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia and the Americas*, 673-693. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Anonymous.c.1835. 紅毛通用番話 (hùhng mòuh tùng yuhng fàan wá --- *The common language of the Red-haired Foreigners*). Guangzhou.

Ansaldo, Umberto. 2007. Review of McWhorter, John, 2005, Defining Creole. Oxford University Press. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 22 (1). 170-176.

Ansaldo, Umberto 2009. *Contact languages: Ecology and evolution in Asia*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ansaldo, Umberto & Matthews, Stephen. 2004. The origins of Macanese reduplication. In Genevieve Escure & Armin Schwegler (eds.), *Creoles, contact and language change: Linguistic and social implications*, 1-19. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Ansaldo, Umberto, Matthews, Stephen & Smith, Geoff. Forthcoming. The Cantonese substrate in China Coast Pidgin. In Claire Lefebvre (ed.), *Substrate influences in Creole languages*.

Baker, Philip. 1987. Historical developments in Chinese Pidgin English and the nature of the relationship between the various pidgin Englishes of the Pacific region. Journal of Pidgin and Creole Languages 2: 2, 163-207.

Baker, Philip & Mühlhäusler, Peter. 1990. From business to pidgin. *Journal of Asian Pacific Communication* 1 (1). 87-115.

Benson, Philip. 2005. The origins of Chinese Pidgin English: Evidence from Colin Campell's diary. *Hong Kong Journal of Applied Linguistics* 10 (1). 59-77.

Bisang, Walter. 1985. *Das chinesische Pidgin Pidgin-English*. Zürich: Universität Zürich.

Bolton, Kingsley. 2003. *Chinese Englishes: A sociolinguistic history*. Cambridge: Cambridge University Press.

Boxer, Charles R. 1973. *The Portuguese seaborne empire*. Hammondsworth: Pelican.

Boxer, Charles R. (ed.). 1953. *South China in the sixteenth century*. London: Hakluyt Society.

Chen, Ta. 1939. *Emigrant communities in South China: A study of overseas migration and its influence on standards of living and social change*. Shanghai: Kelly & Walsh Ltd.

Coates, Austin. 1966. *Macao and the British: Prelude to Hong Kong 1637-1842*. Oxford: Oxford University Press.

Downing, C. Toogood. 1838 [1972]. *The Fan-Qui in China in 1836-7*. Shannon: Irish University Press.

Dryer, Matthew S. 2003. Word order in Sino-Tibetan languages from a typological and geo-graphical perspective. In Graham Thurgood & Randy LaPolla (eds.), *Sino-Tibetan languages*, 43-56. Richmond: Curzon Press.

Erbaugh, Mary & Yang Bei. 2006. Two general classifiers in the Shanghai Wu dialect: A comparison with Mandarin and Cantonese. *Cahiers de Linguistique Asia Orientale* 35 (2). 169-207.

Escure, Genevieve. To appear. Is serialization simple? Evidence from Chinese Pidgin English. In Thomas Klein & Nicolas Faraclas (eds.), *Simplification in pidgins and creoles*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Fairbank, John K. 1953. *Trade and diplomacy on the China Coast: The opening of the treaty ports, 1842-1854*. Stanford: Stanford University Press.

Fairbank, John K. & Goldman, Merle. 1998. *China: A new history. Enlarged edition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Faraclas, Nicolas, Corum, Micah, Arrindell, Rhoda & Pierre, Jean O. 2007. *Sociétés de cohabitation* and the similarities between the English-lexifier Creoles of the Atlantic and the Pacific: The case for diffusion from the Afro-Atlantic to the Pacific. Paper presented at the 24th Meeting of the Society for Pidgin and Creole Linguistic.

Gunn, Geoffrey C. 1996. *Encountering Macau: A Portuguese city-state on the periphery of China, 1557-1999*. Boulder, CO: Westview.

Hall, Robert AJ. 1944. Chinese Pidgin English grammar and texts. *Journal of the American Oriental Society* 64. 95-113.

Hunter, William C. 1885. *Bits of old China*. London: Kegan, Paul, Trench and Co.

Leland, Charles. 1892. *Pidgin English sing-song*. London: Kegan Paul.

Li, Michelle. 2011a. Chinese pidgin English and the origins of pidgin grammar. Doctoral dissertation. The University of Hong Kong.

Li, Michelle 200lb. Origins of a Preposition: Chinese Pidgin English long and its Implications for Pidgin Grammar. *Journal of Language Contact* IV: 269-294.

Li, Michelle, Matthews, Stephen & Smith, Geoff P. 2005. Pidgin English texts from the *Chinese-English Instructor*. *Hong Kong Journal of Applied Linguistics* 10 (I). 79-168.

Martino, Elena. 2003. *Chinese pidgin English: Genesi ed evoluzione* [Chinese Pidgin English: Genesis and evolution]. Tesi di Laurea. La Sapienza, Roma.

Matthews, Stephen & Yip, Virginia. 1994. *Cantonese: A comprehensive grammar*. London: Routledge.

Morrison, Robert. 1807-8. Unpublished journal in Council for World Mission archives, South

China—Journals, Box 1.

Morse, Hosea B. 1926. *The chronicles of the East India Company trading to China 1635-1834*. 5vols. Oxford: Clarendon Press.

Mühlhäusler, Peter & Baker, Philip. 1996. English-derived contact languages in the Pacific in the 20th century. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler & Darrel T. Tryon (eds.), *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*, 497-522. Berlin: Mouton de Gruyter.

Mundy, Peter 1637. Itinerarium Mundii [The travels of Peter Mundy]. Edited by R.C. Temple as *The Travels of Peter Mundy, in Europe and Asia, 1608-1667*, volume 3 (1919). Cambridge: Hakluyt Society.

Nicol, John. 1822. *The life and adventures of John Nicol*. Edinburgh: William Blackwcod.

Noble, Charles F. 1762. *A voyage to the East Indies in 1747 and 1748*. London: Becket and Dehondt.

Paviot, Jacques. 2005. Trade between Portugal and the Southern Netherlands in the l6th century In Ernst van Veen & Leonard Blussé (eds.), *Rivalry and conflict: European traders and Asian trading networks in the l6th and l7th centuries, 24-34*. Leiden: CNWS publications.

Reinecke, John E. 1937. *Marginal languages: A sociological survey of the creole languages and trade jargons*. Yale University, Ann Arbor UMI.

Selby, Anne & Selby, Stephen. 1995. China Coast Pidgin English. *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society* 35. 113-141.

Shi, Ding Xu 1986. *Chinese Pidgin English: Its origin and linguistic features*. M.A. University of Pittsburgh.

Shi, Ding Xu. 1991. Chinese Pidgin English: Its origin and linguistic features. *Journal of Chinese Linguistics* 19 (1). 1-40.

Shi, Ding Xu. 1993. Learning Chinese Pidgin English through Chinese characters. In Francis Byrne & John Holm (eds.), *Atlantic meets Pacific: A global view of pidginization and creolization*, 459-464. Amsterdam: John Benjamins.

Siegel, Jeff 1990. Pidgin English in Nauru. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 5 (2). 157-186.

Smith, Geoff P 2002. *Growing up with Tok Pisin: Contact, creolization, and change in Papua New Guinea's national language*. London: Battlebridge.

Smith, Geoff P. 2008. Chinese Pidgin English pronouns revisited. *Hong Kong Journal of Applied Linguistics* 11 (I). 63-76.

Soothill, Wdliam E. 1925. *China and the West: A sketch of their intercourse*. Oxford: Oxford University Press.

Stoller, Paul 1979. Social interaction and the development of stabilized pidgins. In Ian F. Hancock (ed.), *Readings in creole studies*, 69-72. Ghent: Story-Scientia.

Tamburello, Adolfo. 1983. La cultura occidentale nel Giappone Tokugawa, la mediazione olandese e russa nel 1800 [Western culture in Tokugawa Japan, Dutch and Russian mediation in 1800]. *Il Giaone* 21. 5-23.

Tong, King-Sing. 1862. *The Chinese and English Instructor, 6 vols*. Guangzhou.

Tryon, Darrel, Mühlhäusler, Peter & Baker, Philip. 1996. English-derived contact languages in the Pacific in the 19th century (excluding Australia). In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler & Darrel Tryon (eds.), *Atlas of Languages of intercultural communication in the Pacific, Asia and the Americas*, 471-495. New York: Mouton de Gruyter.

Van Dyke, Paul A. 2005. *The Canton trade: Life and enterprise on the China coast, 1700-1845*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Whinnom, Keith. 1971. Linguistic hybridization and the 'special case' of pidgins and creoles. In Dell Hymes (ed.), *Pidginization and creolization of languages*, 91-115. Cambridge: Cambridge University Press.

Williams, Samuel W 1836. Jargon spoken at Canton. *Chinese Repository* 4. 428-435.

訳者あとがき

この論文は Umberto Ansaldo ed., *Pidgins and Creoles in Asia*（John Benjamins, 2012）に収められた一篇で，原題は China Coast Pidgin: Texts and contexts である。一般言語学の角度から中国沿岸ピジンの言語特徴を詳細に記述するとともに，ピジンの誕生と発展に関して歴史的側面からの検討を行っているのがこの論文の特徴と言える。こうした研究を日本の中国語学界に紹介したいと考え，著者の一人であり，論文集の編者でもあるシドニー大学教授 Ansaldo 氏に許可を得て訳出した次第である。氏は中国語のみならず，広くアジアの諸言語が関わる言語接触の問題を精力的に研究されており，主著として *Contact languages: Ecology and evolution in Asia*（Cambridge University Press, 2009）などがある。シンガポール国立大学，アムステルダム大学，香港大学を経て，2018 年 7 月からはシドニー大学で勤務されている。

実際の論文には『紅毛通用番話』と『英語集全』の書影が掲載されているが，紙幅の都合により省略した。『紅毛通用番話』については，内田慶市・沈国威編『言語接触とピジン－19 世紀の東アジア（研究と復刻資料）』，（白帝社，2009）に収められるものがより鮮明である。『英語集全』については京都大学東アジア人文情報学研究センターの「東方学デジタル図書館」において全 6 巻の画像が閲覧可能なので，そちらを参照されたい。

なお，翻訳にあたっては竹越孝先生に校閲していただき，竹越美奈子先生からも有益な助言をいただいた。ここに感謝の意を表する。